

社寺参詣曼茶羅の世界

# 吉崎御坊と蓮如

岩鼻通明

## 参詣曼茶羅とは？

前回、参詣曼茶羅についてさまざまな側面から概観を試みたが、参詣曼茶羅とは何か、という定義づけを明確には行なわなかった。「曼茶羅<sup>まんだら</sup>」ということはサンスクリットのマンダラを音訳したもので、本来「本質を得る」という意味、すなわち、仏の最高の悟りを得るということで、円輪具足とも訳され、曼茶羅図はこの真理を絵画表現したものである。

ところが、実は「参詣曼茶羅」という用語は、これらの作成された中世末期から使われていたのではなく、一九六八年に開かれた京都国立博物館の「古絵図」特別展に際して発案された学術用語なのであり、「礼拝を目的として制作され、風俗画的、説話的な要素を多分にもりこんだ曼茶羅図を総称する概念」との規定が行なわれている(注1)。

一方、川村知行氏は参詣曼茶羅の特徴として、

上方の左右に日輪・月輪を描いて霊地であることを示す。

重要な社殿・仏堂をはじめ、鳥居・回廊まで克明に配する。

参道には信者が名所を参詣する姿を描く。

という三点を指摘し、さらに、礼拝画と世俗画の二重の性格を有すること、絵解きされることが最初から想定されていることを付け加えている(注2)。

しかし、日輪・月輪は、たとえば紀三井寺・粉河寺・葛井寺・中山寺の参詣曼茶羅など、描かれていない事例がかなりの数にのぼり、必ずしも参詣曼茶羅に不可欠の要素とはいえない。社殿を克明に配するという点も、伊勢参詣曼茶羅において、外宮正殿と内宮正殿が、いわゆる唯一神明造には表現されておらず、果たして当時の社殿の姿が正確にスケッチされたかどうかは問題となる(注3)。

ただ、参詣する多くの人物図像が描かれることが参詣曼茶羅に共通する特徴である点は確かである。これらの人物は近世初期風俗画の人物表現に近似しており、工房で類型化されていた人物図像が参詣曼茶羅の画中にちりばめられたわけである。しかし、参詣曼茶羅そのものは、あくまでも聖域の表現が目的であるから、これを世俗画の性格をもつものとするには疑問を感じる。

以上のように、厳密に概念規定をするのには困難な面が多く、また、あまりきゅうくつな定義づけを行なってしまつと、そこからこぼれ落ちてしまつものがたくさん生じてしまつ。

実は、目下の筆者の関心は、むしろそのような絵画史料、すなわち、参詣曼茶羅の周縁部に位置するものに集まつている。たとえば大阪市立博物館『社寺参詣曼茶羅』(平凡社刊)では取りあげられなかった、立山・白山曼茶羅などの山岳信仰系の参詣曼茶羅がそれらに含まれる。

そして、今回取りあげる吉崎御坊参詣絵図もまた、参詣曼茶羅にかなり類似した特徴をもつ絵図といえよう。

## 吉崎御坊の地理的環境と歴史

福井県の北東端、石川県と接する地、すなわち、かつての越前と加賀の国境に位置する吉崎は、本願寺八代宗主蓮如れんにょの開いた浄土真宗の寺内町として著名である。

吉崎は越前と加賀の国境に位置すると同時に、水陸の接点に立地している。大聖寺川が日本海に注ぎ込む河口部にラグーンだじょうしがわの北潟湖が広がっているが、吉崎は北を大聖寺川、すぐ西を北潟湖に囲まれた水陸交通の要地であり、まさしく境界の場に形成された寺内町であった。

しかし、吉崎が中世寺内町として栄えた期間はい意外に短いものであった。蓮如が吉崎に入ったのは文明三年（一四七一）七月で、吉崎一円の名主であった大家彦左衛門吉久の協力を得て、吉崎道場建設に着手する（注4）。

ところが、文明六年三月、火災に襲われて本坊が全焼、また、この頃より加賀の高田派門徒との抗争、あるいは南加賀の守護富樫政親とがしとの対立がめだちはじめ、ついに文明七年八月に、蓮如は吉崎を退去する。そして、永正三年（一五〇六）越前国主朝倉氏は、浄土真宗寺院門徒を加賀へ追放し、吉崎御坊も破却したのであった（注5）。

## 吉崎を描いた絵図

吉崎を描いた歴史時代の絵図（古地図）はかなりの点数が存在し、研究論文もいくつかが発表されている（注6）。これらの絵図を表現内容や作成目的から分類してみよう。

まず、吉崎を描いた絵図は、蓮如時代の吉崎御坊を描いた中世絵図（ただし、後世の写本が多い）と、江戸時代に入って、東西本願寺の別院の建設によって形成された門前町を描いた近世絵図とに大別される。

さらに、中世絵図は吉崎道場とその周囲を表現した「吉崎御坊絵図」と、文明六年の火災時の状況を描いた「蓮如火難之図」（写真1）のふたつに分けられる。一方、近世絵図は東西本願寺が蓮如当時に御坊の置かれた吉崎山の領有権をめぐる争った相論絵図と、吉崎へ参詣に訪れた旅人相手の名所図（図1）とに分けることができる。

さて、これらの絵図の中で、参詣臺茶羅に類似した性格をもっているのは、もちろん吉崎御坊絵図であり、以下ではこの図を中心に検討を加えたい。



1 「蓮如火難之図」 東本願寺吉崎別院蔵

## 照西寺蔵吉崎御坊絵図

吉崎御坊絵図の代表作として、滋賀県多賀町保月の照西寺蔵の絵図をあげることができる。辻川達雄氏によれば、往時の吉崎道場を画いた現存最古とおもわれる絵図、文明年間の筆と伝える貴重な史料、絵図は縦一六六センチ、横一一七センチの大幅で、越前の勝念寺（廃寺）より当時総道場であった照西寺へ入寺した僧が、持参したものと伝えられている（注8）とのことである。

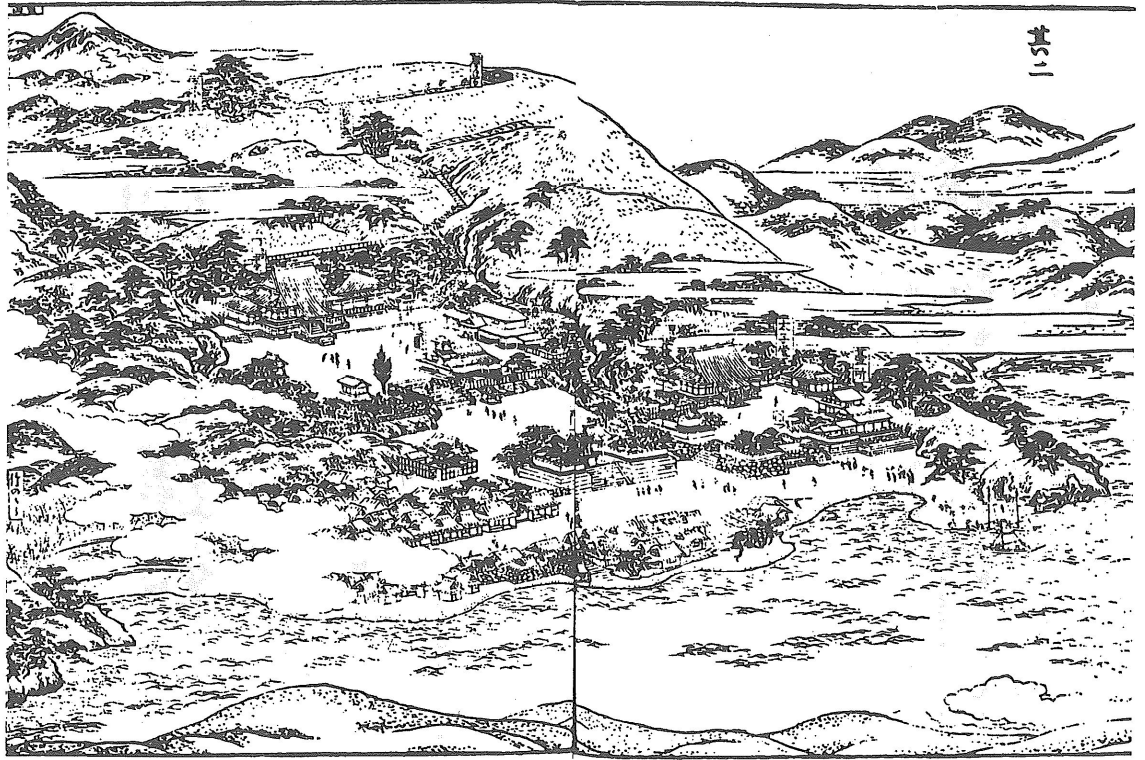


図1 吉崎山の図『二十四輩順拝図絵』より

本図の特徴は、すでに辻川・土屋・金井の各氏も指摘しているように(注9)、初期寺内町の景観

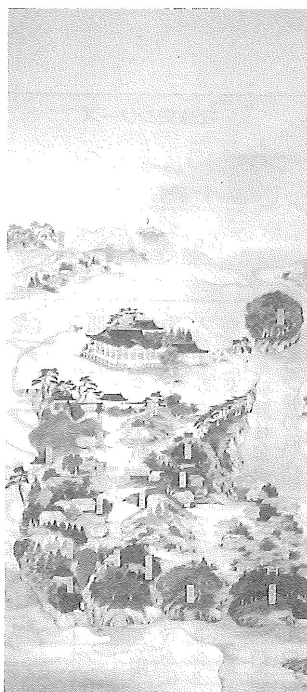
に描いている点にある。本坊のある吉崎山へ至る山門の大路に沿って多屋九房と呼ばれた門弟の坊

舎が連なり、門外には粗末な茅葺きの寺内の民家が並んでいる。

吉崎山はあたかも平山城のごとくであり、寺内町も後には城下町と同じく平城的スタイルをとって発展していくのであるが、本図には山頂の本坊、山麓の町屋という初期寺内町の垂直的構造が的確に表現されている。なお本図の写本と想定される絵図が数点吉崎の寺院に伝来する(写真2・写真3)。



3 「吉崎御坊絵図」 吉崎山願慶寺蔵



2 「吉崎御坊絵図」 東本願寺吉崎別院蔵

## 本覚坊蔵吉崎絵図

一九八七年夏、東北大学の中世史の先生方を中心とする文部省科研費の調査に同行して新潟県上越市高田郊外の本覚坊へうかがった折に、著名な戦国大名の古文書群とともに、二枚の吉崎絵図を拝見することができた。

本覚坊は前述の多屋九房のひとつであり、寺伝によれば、文明年間に越前の地を離れて越後に移ったという。また、室町後期の作とみられる蓮如上人絵伝の掛軸もあり(写真4)、吉崎絵図の二幅とともに、先代住職の時代には「御絵伝」と称されて、絵解きが行なわれていたとのことである。



4 蓮如上人絵伝 本覚坊蔵

さて、これらの吉崎絵図のうち、一幅は前述の照西寺蔵吉崎御坊絵図に近似した内容をもっており、

り、こちらを仮に「本覚坊蔵吉崎御坊絵図」(写真5)と称することにする。この図の特徴は、解説的な文字注記が図中に豊富に書き込まれている点にある。他の吉崎御坊絵図の場合は建物の名称程度しか注記がないので、読解に際して大きな手がかりとなる。

この図の左下には、

「実恵様御筆ヲ以写取者也

新潟称念寺供物也

享保十八丑八月晦日

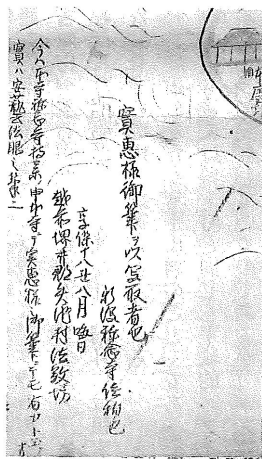
越前堺井郡矢池村法教坊」

という記載があり(写真6)、江戸中期の写本であることが知られる。そして、文字注記には昔と今、すなわち蓮如当時の文明年間と、本図の作成時の享保年間との景観変遷を比較した記載が多くみられる。たとえば「吉崎昔は家少々ちりて有之大屋道場ト云 今八無此家数式百軒程有之候」といった注記がある。

さらに、東西の本願寺の建物には朱点が打たれており、まさに本図は中世と近世の吉崎を比較した絵図となっているのである。本図以外の吉崎御坊絵図は、蓮如時代の中世の吉崎を描くことに専念しており、この点の本図の大きな特色となっている。



5 「吉崎御坊絵図」 本覚坊蔵



6 本覚坊蔵吉崎御坊絵図の文字注記

一方、もう一幅の絵図は他の吉崎絵図にはみることのできない独自の構図をもっており結論から先に言えば、参詣曼荼羅に類似したものといえる。したがって、本図を仮に「吉崎御坊参詣絵図」(カラー図版)と称することとする。浄土真宗においても、参詣曼荼羅様の絵図が作成されていたことに注目する必要がある。





「吉崎御坊参詣絵図」本覚坊蔵

本図には参詣曼荼羅にしばしばみられる雲烟の技法が用いられ、全体を三分割する構図がとられている。上段には吉崎の本坊に参詣する人々が描かれ、堂内には蓮如と門弟たち、堂外には信徒の人々の姿が表現されている。

この人物配置においても、堂内は僧侶、堂外は武士や婦女子という聖俗の描き分けが明瞭に認められる。

そして、中段には中世の吉崎御坊の全容が鳥瞰図風に描かれている。中段にも四ヶ所に雲烟がたなびいているが、これらは途中で途切れており、上段と中段との境の雲烟のように端から端まで延

びて画面を区切るといふ機能を果たしているわけではない。この中段の描写の部分は他の吉崎御坊絵図と類似しているが、松の描写が書き加えられたり、あるいは抹消されたりと、後世に手を加えられた切り貼りの跡が一部に存在する。

さて、下段の存在が本図の最大のユニークな点であろう。この部分は右側が鹿島の森から塩屋、浜坂へと続く海岸砂丘の描写であり、北潟湖を隔てて左側は近世の吉崎山の描写となっている。山上には姫松と御腰掛石（蓮如が座って鹿島（写真）や日本海を眺めたといわれる）が残るのみで何ら建造物はみられない。

先述のように、近世に入り東西本願寺が吉崎山上の領有権をめぐって対立し、結局は両寺ともに山麓に寺院を建立し、山上は利用されないまま現在に至っているのである。

このように、上・中段には中世の吉崎御坊を描き、下段には近世の吉崎山を描いて、中世と近世の景観を一幅の絵図中に対比させるという構図はまことにユニークなものであり、私見の限りでは他に例をみない珍しい絵図である。



7 吉崎から眺めた鹿島

## 縁起絵と参詣絵図

以上紹介した吉崎絵図は、前述のように蓮如上  
人絵伝と対になって公開されていた。また、先に  
触れた蓮如火難之図も吉崎御坊絵図と一对のもの  
であった可能性が高い。つまり、縁起絵ないし祖  
師絵伝の内容の絵図(注10)と、参詣絵図が一对と  
して扱われる場合がしばしばあったことが想定さ  
れる。

ここで思い出されるのは、先日絵解き研究会の  
夏期調査で訪れた愛知県知多半島の野間大坊(大  
御堂寺)で現在も行なわれている絵解きである。  
野間の地は平治の乱で敗走した源義朝が暗殺され  
た終焉の場であり、義朝の最期の場の光景を描い  
た絵図と、その子頼朝によって再建なった大御堂  
寺の伽藍絵図の二幅が客殿内に並べて掛けられて  
おり、住職の水野隆圓師によって絵解きが行なわ  
れている(注11)。

この例のように、縁起絵ないし絵伝と、参詣絵  
図が対となって活用されていた事例は意外に少な  
くないように思われる。かなりニュアンスは異な  
ってこようが、那智参詣曼荼羅と観心十界図もま  
た、一对の絵図であった。今後、我々はこのよう  
な事例の比較検討を進めていく必要がある。

以上、吉崎御坊絵図を例にとって、参詣曼荼羅  
の周縁に位置する絵図に関して論じてみた。参詣  
曼荼羅自体は目下のところ、合わせて百点程度し  
が存在が判明していないが、参詣曼荼羅に類似し  
た絵図を含めれば何倍もの量になることが予測さ  
れる。今後の絵画史料研究をより実りあるものに  
発展させていくためにも、参詣曼荼羅様の絵図の  
調査・探索が一層必要となろう。

(いわはなみちあき人文地理学)

\*写真はいずれも一九八八年七月、筆者撮影

## 注

- (1) 難波田徹「社寺参詣曼荼羅図について」『芸  
能史研究』二七、一九六九年。
  - (2) 川村知行「参詣曼荼羅」『日本美術史事典』  
平凡社、一九八七年。
  - (3) 西山克「聖地のディスクール」(葛川絵図研  
究会編、『絵図のコスモロジー』下巻『地人  
書房、近刊)。
  - (4) 辻川達雄「蓮如 吉崎布教」誠文堂新光社、  
一九八四年。また、吉崎御坊に関する蓮如  
自身のコメントはその書簡集である「御心  
み」の中に散見する(出雲路修校注『御心み』  
平凡社東洋文庫、一九七八年)。
  - (5) 『日本歴史地名大系十八 福井県の地名』  
平凡社、一九八一年。
  - (6) 土屋久雄「古図からみた吉崎御坊跡」金津  
町教育委員会、一九七六年。
- 金井年「吉崎における中世的景観と近世的  
景観 絵図を通してみた」『歴史地理学紀  
要』二六、一九八四年。
- 草野顕之「栗津家記録 吉崎御坊絵図」  
『大谷大学図書館報』八、一九八八年。

(7) たとえば、文化六年刊の『二十四輩順拝図会』所収の吉崎山の図をあげることができ(林英夫編『日本名所風俗図会一八』角川書店、一九八〇年)。相論絵図がおおむね平面図であるのに対し、名所図は鳥瞰図のスタイルをとることが多い。

(8) 前掲注4参照。同書の表カバーには本図のカラー写真が印刷されており、カバーの裏にこの解説が添えられている。また、本図のカラー写真は『週刊朝日百科日本の歴史』二六 一向一揆と石山合戦『朝日新聞社、一九八六年』にも収められている。

(9) 前掲注4および6参照。

(10) 松尾剛次『鎌倉新仏教の成立』古川弘文館、一九八八年、によれば、祖師絵伝は神話化した祖師信仰から生み出されたものであり、「蓮如火難之図」の場合も描かれた内容は、伝説的なもので、事実かどうかは疑問とされており、したがって、作成年代も、従来の文明年間説は疑問の余地がある。さらに言えば吉崎御坊絵図も、参詣曼荼羅に過去の盛時の景観を描いたものがみられるのと同様に、蓮如当時の作成かどうかを再検討する必要がある。

(11) 林雅彦・犬飼隆「尾陽知多郡大御堂寺絵解」(林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』三弥井書店、一九八三年)。